

五山に投影したる中國文化

——特に思想に就いて——

荻 須 純 道

- 一、はし が き
- 二、中國思想の發達
- 三、宋學と禪
- 四、儒禪の一致を鼓吹せる契嵩
- 五、契嵩の思想と吾五山

一

かつて中國民族の築き上げた文化の中、吾が國文化に大きな影響を與へたものは隋唐の文化と宋元明の文化である。隋唐の文化は吾が奈良平安の文化に著しく投影したし、宋元明の文化は吾が鎌倉室町の中世文化に清新な映影を投じている。この兩者の中五山に影響を與へたのはいふまでもなく後者の文化である。

さて宋は政治力の乏しき國であつた。絶えず北方民族から壓迫され、遂ひには蒙古のために滅された。然しながら北方民族の壓迫は却つて時人の覺醒を促し、思想文化の上に刺戟を與へ反省せしめた。乃ち學藝には異色あるものを生み、輝しき發展を遂げている。儒學は清新潑刺として劃期的な發達をなし、宋學と稱せらるゝに至つた。宋學の勃興はまさしく幽玄なる中國哲學の勃興であつた。又文學に於いても唐代に劣らず盛大であつた。歐陽修あり、蘇東坡

あり、或は又王安石等ともに詩文の優秀なるを以て世に喧傳された。史學には司馬光の資治通鑑二百九十四卷の大有ある。或は又繪畫に於ても徽宗皇帝が花鳥山水の名人であり、帝の美術保護獎勵は所謂宋畫の興起を見るに至つた。毛筆を以て墨の濃淡のみにて人物、山水、花鳥等の氣分を表現し精神を畫き出すことは東洋の性格の著しく現れたものでもあり、宋畫の特長でもあつた。畫家の中には夏珪、馬遠、梁楷、李龍眠、牧溪等が世に知られている。これ等宋代の學藝は概していふならば禪の刺激を受くところが多かつた。

當時の禪僧は吾が國に禪を傳來するために中國日本の間を往來し、禪とともにこれ等宋代の學藝やその他一般文化を輸入し、吾が國文化に裨益するところが大であつた。榮西が茶種を齎し喫茶養生記を撰述したことは人のよく知るところである。又道元の俗弟子加藤四郎左衛門景正が宋の陶法を日本に傳へたのが瀬戸燒の起原であつたり、博多織は聖一國師の俗弟子滿田彌左衛門が宋の染織法を學び來り、博多に住して染織業を始めたのが博多織の起原であつたとのことである。(東福寺誌) その他味噌、醤油、豆腐、饅頭の製法まで禪僧の往來により附帶して日本に移植されたといはれている。かゝる卑近な日常生活に緊密な事柄まで禪僧の中日往來に關係して移植された。然しなから吾が國に於ける精神文化の上に最も大きな影響を與へたのは禪僧によつて宋學が輸入され、繼承鼓吹されたといふ事實である。

二

所謂宋學の成立は宋代殊に南宋の朱子に至つて成立した。然しその先蹤ともいふべき中國に於ける思想系統につき一瞥するならば、元來中國の思想には二つの源流があつた。それは儒教であり、道教である。儒教は政治的性格——霸道に非らずして王道を理想とする——をもつ實踐的な實學であるが道教は神祕的でしかも思索的な傾向をもつていた。この二つの思想源流をもつた中國に佛教が公傳したのは後漢の明帝永平十年(西紀六四年)といなれているが、こ

の佛教が中國に傳來した頃は、佛教が中國の思想界に活潑な動きを示した譯ではなく専ら佛典の翻譯が試みられていた。然しながらこの中國の思想界に、佛教殊に大乘佛教の哲理が強くその光を投じたのは鳩摩羅什の出現による。彼は西紀四百年姚秦の王者に迎へられ西域より中國に來朝し、大乘の諸經論を翻譯した。彼は中國佛教史上四大譯經家の隨一に數へられる人で、龍樹の中觀思想を中心として般若經典や中論、百論、十二門論、大智度論、成實論等空系統の經論を翻譯し、佛教の紹介に力めた。かくして彼の思想界に残した足跡は大いなるものがあつた。彼の門下の人々もその思想發展に努めた。例へば僧肇の如きは肇論を作りて佛老の一致を試み老莊思想にかりて佛教の理解に力め、中國の民族的心理性に適應せしめんとした。

かくして佛教思想の滲透に力めた三論學派はやがて六世紀の後半から七世紀の初頭にかけて吉藏（嘉祥大師）が世に出ずるに及び三論宗の興起を見たのである。新に思想體系として三論宗が興起したことは、儒教と道教の國であつた中國にとりては輝かしき出來事であつた。續いて隋唐の代となり、天台、華嚴、唯識等の佛教々學が興起したが、中でも華嚴哲學は佛教思想の極致であり、宗教的思索の最高峰として中國人の思索精神に強い刺激を與へた。かく佛教々學が興隆し、殊に華嚴哲學が知識人に深い關心をもつた頃、當時興隆の機運に向いつゝあつた禪が、中國人の心を把握していた。不立文字の禪は文字や知識によらずに直觀的理解を以て、直ちに究極の實在を把握しようとするのであるが、その内容を表現する場合、佛教哲理の精粹を極めた華嚴哲學によるものが最も好き方法であつた。禪と華嚴との教禪の一致といふことが澄觀（七三八—八三八）や宗密（七八〇—八四一）等によつて試みられた。彼等は華嚴の學僧であると同時に禪に參究した人々であつた。そして彼等の精練された佛教思想は儒學者への思想的反省を促している。例へば前者には華嚴經疏の如きものがあり、後者には原人論の如きものがある。かくして唐代既に宋學即ち理學が勃興する素地が出來、華嚴、禪、老莊、儒學の諸説が調和融合して革新的な學風を生ずるに至つた。

翻つて儒學の進展を見るに漢唐の儒學は訓詁學であつた。經書の字句を解釋するこの學は唐の孔穎達が五經正義（詩、書、易、春秋、禮記の註釋）を著すに至り全く大成した。然し孔孟の立教精神を省るとき、振はざりしこと甚だしかつたといはれている。然しながら覺醒された中國人の思索精神は宋代に至り、從來の倫理說より更に深邃なる哲學的傾向をとるに至つた。即ちこの宋學は理學とも性理學ともいはれ、その成立には濂洛關閩の四家を推さねばならぬ。「濂」とは周濂溪の學、「洛」は洛陽の程明道、程伊川の二子の學、「關」は關中の張橫渠の學、「閩」とは閩即ち今日の福建省地方の朱子の學を指すものであり、これ等四家と共に名高きものに邵康節や陸象山がある。

宋學の始祖周濂溪は名は敦頤、字を茂叔といひ、道州（湖南省）の濂溪の人で深く易理を究め、太極圖及び太極圖說一卷、通書一卷とを著して、世に濂溪先生と稱せられ、神宗の熙寧六年（一七三三）五七歳を以て歿している。周子が生存した時代は禪宗極盛の時代であり、從つて周子は禪との交渉があつた。周子が提撕を受け請益した禪僧には鶴林壽涯、黃龍慧南、晦堂祖心、東林常聰、佛印了元等があつた。嘗て周子が晦堂祖心に教外別傳の旨を問ふた處、祖心はこれを諭していふには、爾自らの家屋裏に向つて修道すべきことを説き、孔子は朝に道を聞けば夕に死するも可なりといつたが、何を以て道となし、夕に死するも可なるや、顔子は其の樂を改めず、樂しむ處は何事ぞやなる言に對し、深く省る處があつたといふ。（居士分燈錄）或は又宋元學案によれば東林常聰に請益した時、靜坐をすゝめられ月餘にして得る處があり、次の如き詩を呈示したといふ。

書堂兀坐萬機休 日暖風和草自幽

誰道二千年遠事 而今只在眼晴頭

更に居士分燈錄の語るところによれば、周子がかつて嘆じていふには「吾がこの妙心は實に黃龍によつて啓迪され、

佛印の下に發明した。然し易理廓達は東林常聰の提撕による」と。寔に周子が禪に得るところありしことを知る。

周子の學風を繼承した弟子程明道（名は顥一〇八五年歿）程伊川（名頤一一〇七年歿）兄弟への禪思想の影響も考へられ。程子の父は學識があり、殊に母は讀書を好み博く古今を知る賢母であつたといふ。佛法金湯編の語るところによれば、程明道は華嚴の哲學に深く悟るところがあり、禪門の威儀清規に共鳴している。かつて定林寺といふ寺院を過ぎた時、偶々衆僧が堂に入るのを見、周旋歩武、威儀濟々、鼓を伐ち、鐘を考ち、内外肅靜、一坐一起、並に清規に準ずるのを感じ「三代の禮樂盡く是にあり」とした。蓋し清規生活は佛教に儒教の禮樂を取り入れたるところに一特色があるものとされている。三代の禮樂を求めて止まなかつた程明道が、これを儒門の中に求めて求められず却つていま定林寺なる禪寺に於いて三代の道を發見し、驚嘆感激したことであらう。

程明道の弟伊川は資性剛直であつた。彼は靈源惟清に參じて禪要を問ひ、或は佛學研鑽の結果、佛祖の辭意を以て自家の學説を表現せんとした。例へば澄觀の華嚴經疏の言句を用いて「如易傳序體用一源顯微無間」とした如くであつたと傳へらる。（普燈錄）かつて黨禍により涪州に貶せられ、渡江の時波荒く船は中途にして流され覆らんばかりであつたが、伊川は自若として安坐常の如くであつた。船中父老ありて問ふには「君獨り怖色なきは何ぞや」と伊川いふ「心誠敬に存すればなり」父老いふ「固り善し、然れども心なるには若かし」と。岸に着き伊川はこの父老と語らうとしたが、既に去りたる後であつたといふ。常盤大定博士はこの父老は禪師であり、靈源惟清との交渉はこの時より後に初まれるものと思ふとされている。（支那に於ける佛教と儒教道教）その言行禪家の如く、周子より一段と佛教に接近している。この學系よりやかつて朱子を出し宋學を大成した。或は又陸象山を出し、更に王陽明出でて陽明學を展開したが、いずれもみな禪學の影響するところが多かつた。

然し宋儒は佛教哲理を取入れていても、儒家の立場から排佛的な傾向をもつていた。程明道が佛教を異端として語つたといふ語に「道の明ならざる、異端人を害すればなり。昔の害は近くして知り易し。今の害は深くして辨じ難

し。昔の人を惑はすや、その迷暗に乘じ、今の人を惑はすや、その高明による。自ら神を窮め化を知るといふ、而も物を開き務を成すに足らず。名は周徧ならざるなしとす、而もその實は則ち倫理に外る。深を窮め微を極むと云ふ雖、而も以て堯舜の道に入るべからず」。(佛祖歷代通載卷十九)と痛嘆し、異端の教にては開物成務の實を擧げること難しいとするのである。然し程明道は華嚴哲學を學べる人であり、異端の害が高明によるとする點、理論上に於ては佛教を排斥することの不可能なることを認めている。こゝに於て佛教に對抗する理論を創造しなければならぬ。こゝに宋儒哲學の興起があつた。程子の後を承けた朱子は儒學の純正な立場から佛教思想の混同を排斥した。然し朱子は青年時代禪の語録を読み、大慧下の道謙に參禪した人であるという。(居士分燈錄)それ故關師鍊は朱子の態度を激しく攻撃して「佛祖の妙旨を極陋となすは實に憐愍すべし」。(中略)我又尤も朱氏の儒者を賣りて吾を議するを責むるなり。大慧年譜序に云く、朱氏舉に赴きて京に入る。篋中只大慧語錄一部有り。又他書無し。故に知りぬ、朱氏大慧の機辨を剽みて儒の體勢を助くるのみ」(濟北集)といつてゐる。儒家が佛教思想の混同を排斥したことは、儒家の立場を堅持したことにもよるが、實證的に着實なる中國人にとつては、理想的に眞理を強調する佛教をあき足らなく思つたのもあろうか。而も宋儒は既に佛教思想をかりて儒學を哲學的に大成したのである。こゝに於て要請されることは儒佛調和の理論である。

四

宋學の始祖周子が生存した頃、儒佛の融合、儒佛の調和を熱心に試みた禪僧があつた。それは明教大師佛日契嵩(一〇〇七——一〇七二)である。字は仲靈、自ら潛子と號していた。彼は護法的精神に燃ゆる熱血漢であつた。當時敎宗が主張して止まなかつた金口相承二十四祖說に對し、西天二十八祖の心印密付の說を明かにして敎宗に拮抗した。彼は更に禪宗史の研究にいそしみ禪門定祖圖、傳法正宗記、正宗論を著して禪宗史の紛淆を考定した。彼が靈隱

寺の永安精舎に住する頃である。當時知識階級の間には韓愈の排佛論が大に行はれていた。彼はこれ等儒學者の啓蒙をなすために、輔教編を著した。彼は儒學の見地より高遠なる佛教を理を説かんとした。そのうまさる誠實なる論理は當時の學界人をして感動せしむるに至つた。

抑、唐代以來佛教者の儒教觀が、儒教を常に道教の下に置きたるため、宋代朝野の自覺せる儒家は唐代の排佛家韓愈の氣慨に感じて、猛然相呼應して排佛をこゝするに至つた。歐陽修、李觀、石守道等はその急先鋒であつた。然し彼が佛語の孔老の言に會へるものを擧げ、徹しき訓釋を附し文にして誇らず、辯にして争はず、眞摯なる儒佛の調和を試みたるため、宰相の韓琦や歐陽修が契嵩を尊敬して教を受くるに至り、或は又王安石、蘇東坡、黃山谷、陳師道、張商英の如きもこの書によりて歸佛の縁を結んだといふ。(輔教編序跋) それ故この書の影響の偉大なりしことは想像に難くない。然し周子や二程子との關係は詳かではないが、周子は契嵩と同時代であるから、この書の宋學者への影響が考へられる。

輔教編は原教、勸書、廣原教、孝論、壇經贊よりなり、佛出世の教を輔弼するために事目が編次されたものである。その説く處によれば萬有の根元は「性」であるといふ。即ち儒學の性一元論を立てたのである。これを佛教的に言葉を換へていへば、性とは如來常住の心性であり、覺心である。この心性は生きとし生ける一切衆生が本來具有するところのものであり、佛にあつても増さず、衆生にあつても減ぜざるものである。彼は輔教編原教の劈頭に「萬物性情あり、古今死生あり、然り而して死生性情未だ相因つて之有らずんばあらず。死固り生に因り、生は固り情に因り、情は固り性に因る」といふ、萬有の死生性情の因つて來るところを論じ、その究極は性に因るべきことを説いている。各人本來具有する寂靜不動の「性」は萬物の本體であり、一切萬法所依の體でなければならぬ。即ち萬物皆性情があり、性情始めより相因つて存在する。然しながら情は性より發生し、性によつて存在する。性は不變の平等であるが、情は變動の差別的である。それ故萬物はその性を齊しくするも、その情を異にするのである。即ち物に

善惡、厚薄、大小等の別があるのは情の然らしむところである。こゝに於て人に智愚、賢不肖の別を生ずるのである。これを佛教にては人、天、聲聞、緣覺、菩薩の五乘となし、この情を修めんがために五戒十善を説くのである。

「夫れ不殺は仁なり、不盜は義なり、不邪淫は禮なり、不飲は智なり、不妄言は信なり」といふ、佛教の五戒は儒教の五常と同じである。五常、五戒とその呼方は異つてゐるが、その「體」は一つである。然しながら五戒十善は人天のために説いたもので儒教はこゝに止まるもので、即ち治世の教である。唯その廣狹深淺の別あるも、その本然の性を根柢とするに至つては一つである。この性は絶對の一心であり、廣大靈明なるもの即ち眞如である。この心の變ずるものを識といふが、所謂情にして萬物紛然と異體なるはこれがためである。その大本を知らしめんがために漸頓、權實、偏圓の教、四諦、十二因緣、六度の法を説くのである。而もこの大本である心即ち「性」は佛教のみならず易、中庸にも説くところである。即ち儒釋の聖人その性を同じくすると説くのである。因にこの書が吾が國にて初めて刊行されたのは觀應二年（一三五二）のことであり、それは夢窓門下春屋妙葩によつてなされた。時に妙葩は四十一歳であり、夢窓國師の未だ生存している時代であつた。妙葩が刊行した輔教編六冊本の原本は無隠元晦（一三五八年寂）が將來した杭州天目山幻住庵の流通本であつた。この幻住庵本は宋の治平元年（一〇六四）に刊行されたもので、妙葩はそれを夾註輔教編として覆刻した。卷末の奥書によれば

明教大師、五書要義、日本未_レ有_二板行之者_一、江湖英納欲_レ之恰如_二渴而思_レ飲、余爲_レ結_二般若緣_一、遂命_二工以鏤_レ梓云

云 歲次辛卯、觀應二年休夏日、沙門妙葩、拜手

とある。

五

契嵩の儒佛調和は當時の知識階級をして啓蒙するところのものがあつたが、同時に又吾が五山禪僧にも儒佛不二の

理論的根據を與へた。學問の研究は證道の妨げにはならない。修禪と修學とは一致したものである。禪の見性成佛は宋學の窮理盡性とは相通するものであるといふ理念のもとに、五山禪僧は參禪辨道するとともに、儒學を究め詩文をよくした。

五山禪僧は盛んに中國と往來して、中國文化の將來につとめた。即ち明限の來朝僧は禪學とともに中國に新に勃興した宋學をもたらしした。また求法僧は彼の地の明師につき參究し、碩學に接して宋元の文化を移植した。當時の禪僧は傳道と同時に新學風の鼓吹に精進した。又證道と同時に學問の研究を怠らなかつた。佛道を學び修禪することと學問を研鑽することとは何等妨げなかつたのである。かくして五山は幾多の學僧詩僧を輩出して燦然たる文化を發揚した。かつて西歐に於ける中世のキリスト教徒は凡ての學術を神學の附庸となし神學化して、ギリシャ時代の研究的態度を去り、學問の獨立を沮害したので、ために學藝大いに衰頹し、人智蒙昧の所謂暗黒時代を出現した。然し五山の禪僧は詩文に或は訓詁註釋に特長を發揮し、殊に宋學を鼓吹して近世文化の母胎となつたことを想ふ時、五山禪僧の文化的貢獻をたゞえざるを得ない。

これを惟ふに五山禪僧が傳禪とともに中國文化を移植し、學問の研鑽を怠らなかつたといふ理由は、第一には禪自體の性格が開放的で包容性に富むものであるからであるが、第二には宋代の學藝、殊に宋學は禪的要素をもつて成立していることであり、第三には契嵩が儒佛一貫の理論的根據を與へたことである。このことは義堂周信の空華日工集を始め、五山文學全集等の文獻に散見する。五山の禪僧は契嵩を私淑した。彼等は禪者としての立場を堅持しつつも、儒佛不二の理念のもとに經書の研鑽にまた中國文學の研究にいそしんだ。かくして彼等は宋元生粹の中國文學に熟達し、その傑作は當時の中國人をして驚嘆せしめた程である。かくして五山文化は宋元明時代の中國文化が強く投影したものであり、五山禪僧の文化的活動は遠く宋僧契嵩等の思想的影響によるところ大いなるものがあつた。